

梅崎春生「猫の話」語注及び授業案

藪野直史

「現在のやぶちゃん注・私は正直、本作は朗読するだけでよかったと思っただけ。くだくだしい分析など、いらなかったと思っただけ。事実、何人かの生徒が、私が朗読し終わったとき、鼻をすすったのをよく覚えている。それでも、私の懐かしい思い出のために、これを電子化しておきたい（因みに、三年前に再会した十年前の教え子の男子が私の授業のノートを見せてくれたが、そこには私が喋った雑談まで克明に記されてあって、涙がでそうになるほど嬉しかった）。

私は五十五で早期退職した際、三十三年間総て残してきた段ボール二箱あった紙ベースの自分がオリジナルに作った教材や授業案及び関連資料の殆んど総てを断捨離した（例外的に残した中島敦の「山月記」の原典「人虎傳」のダイジェスト・プリント『中島敦「山月記」授業ノート 藪野直史』内の[ここ](#)と[ここ](#)と[ここ](#)）や、「[ここ](#)」の「[先生](#)」の家（以上はブログ版。サイト版は「[心](#) [先生の遺書](#)（一）」〜（[三十六](#)）[附](#)やぶちゃんの**藪み**」の（[十六](#)）や[下宿の推定作画](#)（以上はブログ版。サイト版は「[先生の遺書](#)（[五十五](#)）」〜（[百十](#)）[附](#)やぶちゃんの**藪み**」の（[六十五](#)））などは既に公開済である）。電子データの中には残っているものの、その内の2/3は最早廃棄した旧ワープロで作成したもので、文字列だけしか復元出来ない。本授業案では生徒に絵コンテを描かせる試みなどとしたことから、表形式で作ったシナリオなどの箇所もあるが、ワードでそれを再現するのは労多き割に私の限られた時間の有意な浪費となるため諦めた。なお、語注は高校生向けのものであるから、成人した諸君には言わずもがなの注も含まれる。悪しからず。【二〇一五年十二月十九日復元補正注追加本文省略暫定版ブログ公開】二〇一六年一月一日完全決定版公開】

○本文「現在のやぶちゃん注・授業案と対照させるために、便宜上、全体をⅠ〜Ⅲの大パートに分けて各冒頭にそれを表示し、また、各パート内の形式段落に丸囲み数字で番号を振った。これは私の教師時代の常の流儀である。教師向けの指導書ではしばしば最初に作品を、「生徒に大パートの構成段落に分けさせる」などという作業を掲げるが、私は三十三年高校教師時代、一度として生徒にシークエンス段落を「分けさせた」ことは、ない。少なくとも小説作品は文章の生きた流れであって、しよっぱなから物理的構造分割を「生徒に強いさせる」ことは意味がないとずっと考えて来たし、今もそう思っている。ここで分けるのもあくまで私の稚拙な授業案をせめても読み易くするための方便に過ぎないことを断わっておく。従って、[くれぐれも一緒に公開したベタ・テキストでまず本文を読まれた](#)

[い。これで読むでは、感興を殺がれるからである。】](#)

【一】

- ①大通りに面した運送屋の二階を借りて、若者と一匹の猫が住んでいた。
- ②この猫は、ある日とつぜん、彼の部屋にやってきた。どこからともなく板廂いたびさしをつたって、彼の部屋に入ってきたのであった。そのまま猫は彼の部屋に居ついた。彼も孤独であったから、なんとなくこの猫に愛着をかんじるようになった。
- ③猫の皮は、茶色のぶちで、耳たぶがうすく鋭く立っていた。身体のあちこちが、しなやかにくぼんでいて、尻尾はながく垂れていた。
- ④それまでひどい生活をしていたと見えて、猫はすっかりやせていた。眼だけが大きく澄んでひかっていた。彼は外食券食堂にゆくたびに、食べのこした魚の骨やパンの耳を、紙につつんで持ってかえった。猫はそれを待ちかねて食べた。そのほかに自分で、部屋にやってくるカナブンブンや蠅はえをとらえて食べたりした。猫がいちばん好きだったのは、蟋蟀こおのせであった。運送屋のとなりが空地であったので、そこから蟋蟀が何匹も入ってくるのであった。
- ⑤蟋蟀が部屋に入ってくると、猫は急にしんけんな眼付になって、畳の上にひらくなり、蟋蟀の姿をねらった。その姿勢はなにか力にみちいて、眺めていると、自分が蟋蟀をねらっているような錯覚に彼はおちた。猫がぱっと飛びあがると、かならずその蟋蟀は猫の口にくわえられていた。猫はそれからぱりぱりと蟋蟀を齧み、触角だけを残して、他はみな食べてしまうのであった。
- ⑥彼の部屋には、だからあちこちに、細い剣のような触角がたたみの上にはらばっていた。それが足の裏にざらざらふれるたびに、彼は次のような句を思い出した。

蟋蟀在堂 歳聿其莫

- ⑦それはむかし、伯父さんから習った文句であった。意味はわからなかったけれども、彼は何とはなく、これを記憶していた。その他伯父さんから、いろいろなことを習ったが、覚えているのはこれだけであった。あとのことは、すべて忘れていた。
- ⑧夜になると、猫は彼に身体をすりよせて寝た。そのしなやかな皮のしたに、彼はかぼそい猫の骨格をかんじた。もっといろいろなものを食わせて、肥らしてやりたいと思ったが、貧乏でそれも出来ないのであった。食堂から魚の骨をつつんでかえるのが精いっぱいであった。

- ⑨昼間、ときどき猫はどこかへ出かけて行った。しばらくしてかえってくると、おなかかふくらんでいて、ぐったり横になり、舌で顎あごの辺を舐め廻したりした。どこかに行つて、

何かを食べて来るにちがいはなかった。そんな時は蟋蟀がそばまできても、あまり見向きもしなかった。

「何を食べてきたんだい。おまえは」

⑩彼はよく指先で、やわらかい脇腹をぐりぐりとつついてやったりした。いまどきよその猫に食物をあたえる家もないだろうから、どこかの台所でぬすんで食っているにちがいないと思つたが、彼にはそれを叱るすべもないのであつた。

「ぬすむのもいいけれど、見つからないようにしろよ」

⑪彼はこの猫にカロという名をつけてやつた。意味もない名前であつた。それから三箇月ほど過ぎた。

【II】

①ある曇つた日、彼が窓から大通りを見おろしていると、向う側の横町から、カロが出てきた。なにかへんにふらふらした歩きかたで、いつものような確かさがなかつた。頸くびをしきりに曲げるようにしながら、ひよろひよるとよるめいて、大通りを横切ろうとした。切迫した予感が背をはしつて、彼は窓べりをにぎりしめたまま、身体を思わずのり出した。

そのとたん、右手の方から走つてきた黒い自動車があつというまに視野に入ると、茶色のカロの姿は、ひよろひよるとその車輪のしたに吸い込まれた。

②頭のなかが燃え上るような気持で、彼はそれを瞬間に見た。カロの身体がぐしゃつとぶれる音を、彼はその時全身でありありと感じとつた。自動車はちよつと速力をゆるめたが、すぐにスピードを増して左手の方へ小さくなって行つた。暗い空のした、ひろい車道のまんなかに、カロのつぶれた死骸だけがぼろ布のようにころがっていた。それを一目見たとき、彼は大声でわめき出したい衝動をこらえながら、眼を大きく見開いて、指をがくがくと慄えさせていた。

③その夜、彼は蒲団にもぐつて、長いこと泣いた。カロをこんなに愛していたとは、今まで意識しないことであつた。こみあげてくる涙のなかに、生きているカロのいろんな姿体がかんできて、彼はなおのこと泣いた。外では雨が降ってきたらしく、板廂をはじく水音が聞え、遠く近くで雷の音がごろごろと鳴つた。前の大通りを、自動車が水をはねて疾走してゆく音が、ときどき聞えた。

④翌朝になると、雨はあがっていた。彼は寝巻のまま、はれぼったい臉の下から、乾いた眼で大通りを見おろした。濡れてだだっぴろい車道のまんなかに、カロの死骸があつた。やはり夢ではなかつた。それは昨夜なんども自動車のタイヤにひかれたと見えて、板のよううすっぺらになって、舗道にひらく貼りついていていた。猫の身体のかたちのまま、面積は生きておるときの五倍にもひろがつていた。彼は急に無惨な気がして、また涙が流れ

出そうな気がした。そしてあわてて、窓からはなれた。

⑤大通りを、一日中何十台何百台ともしれぬ自動車が行来した。彼は一日中部屋にいて、その音を聞いていた。

⑥翌日は日が照って、道が乾いた。道が乾くのといっしよに、カロの死骸も乾いた。乾いてみると、それは猫の死骸という感じではなくて、猫の形をしたよごれた厚紙のような感じであった。そしてそれは舗道に貼りついてはいたが、四囲の部分が疾走するタイヤの圧力で少しめくられ、ひらひらと動いていた。その上を容赦なく、いろんな型の自動車やトラックが通った。彼はそれを窓から見おろしていた。

⑦彼はその日一日中、カロのことをぼんやり考えていた。蟋蟀こおろぎをねらうカロの姿とか、蒲団にねむっているカロの格好だとか、彼の着物の裾にじゃれつくカロの感触などが、なまなましく彼によみがえってきた。そのカロがすでに実体をうしなつて、あそこによごれた紙みたいになつて拡がっていることを思うと、胸をかきむしりたくなるような悲哀感が彼をおそうのであつた。あの横町から出てきたとき、どうも歩き方がおかしいと思つたが、ものを盗んでいるところを見付けられ、どこかをしたたか殴られたにちがいない、と彼は思った。そうすると彼は新しく涙が垂れた。

【Ⅲ】

①そしてまた翌日になつた。彼が窓から通りを見おろすと、カロの死骸の感じがすこし変わったように見えた。彼は眼をこらして、しばらくじつと眺めた。確かに昨日より、形が小さくなつたような感じであつた。彼が見ている前で、その時また一台のトラックがカロの上を通りぬけた。その反動でカロの死骸がすこし動いたような気がしたが、はつと気がつくくと、死骸の縁のささくれだつた一部を、たしかに今のタイヤがくつつけて持つて行つたにちがいがなかつた。

②彼は身体のかなから、何か引きぬかれるような感じがして、凝然と立ちすくんだ。

③カロの死骸が、乾くにつれて風化して、皮も骨も内臓もぼろぼろの物質になり、四囲のめくれた部分からすこしずつ、車輪がかすめてゆくに相違なかつた。一廻り小さくなつたところを見ると、昨日から相当量、千切つて持ち去られたにきまつていた。そう思うと彼は、何か言いようのない深いかなしみが、胸にひろがってくるのを感じた。

④彼はその日、窓辺に椅子をおいて、一日中通りを見張っていた。カロの死骸をかすめてゆく自動車がいろいろの、どうしても放つておけない気持がするのであつた。そうして昼の間、何十台という自動車が、カロの上を通つた。それは恰好のいい乗用車もあつたし、がたがたのトラックもあつたし、またオートバイや、まれに靈柩車れいきしゆつしやが、カロの部分ですこしずつ持つて逃げた。そのたびに、彼は両掌で眼をおおつた。

⑤夕方になると、カロは半分になっていた。

⑥次の日も、彼は朝から、窓辺の見張りをつづけていた。カロの死骸はすでに猫の形をうしなつて、一尺四方ぐらいの、白茶けたぼろに過ぎなかった。しかし彼は昨日から、ずっと見張っているせいで、それがカロのどの部分であるかは、はっきりと知っていた。

⑦この日もさまざまな自動車が、カロの上を通った。道が乾き切ったので、カロの死骸も貼りついていて支えを失ったのか、今日はことに脆く持ち去られるようであった。顔の部分はまだ残っていたが、昼ごろ炭俵を積んだトラックがきて、両方の耳を一挙に持つて逃げた。彼はあの薄いするどい耳たぶの形を思い出して、声を出してうめいた。

⑧黄昏のいろが立ちこめてきた頃、カロはすでに手帳ほどの大きさになっていた。それは最後までこのったカロの顔の部分であった。彼は異様な緊張を持續しながら、黄昏れかかった通りを見張っていた。

⑨通りのかなたから自動車の影をみとめるたびに、彼は身をかたくした。そしてその車輪がカロにふれないように、必死に祈願した。

⑩しかしついに、最後にカロを持ち去られる瞬間がきた。それはぼろぼろのタクシーらしく、ななめに揺れながらごとごとと走ってきたのであった。ちらと見た印象では、なかに中年の男たちが五六人、ぎっしりと詰めて乗っていて、それがみんな酔っぱらっているらしかった。窓から手が出たり入ったりした。まるで自動車自体が酔っぱらっているような具合であった。その後尾のタイヤが、あつという間もなく、カロの顔をぺろりとすくいあげたと思うと、がたごとと軋みながら、その酔っぱらい自動車は一目散に遠ざかって行った。

⑪彼は窓からはなれ、部屋のまんなかにくずれるように坐りこんだ。そうして両掌を顔にあて、しずかな声で泣いた。カロがすっかり行ってしまったことが、深い実感として彼におちたのであった。カロの死骸が、いまや数百片に分割され、タイヤにそれぞれ附着して、東京中をかけめぐっていると考えたとき、彼はさらに声をたかめて泣いた。

⑫カロがいなくなつて四日になるから、蟋蟀が何匹も床の間や壁のすみに、安心してとまっていた。本箱のかげにいたその一匹が、その時触角をかすかに慄わせながら、畳の上にはい出してきた。そしていい音を出して一声高く鳴いた。

○語注及び授業案

第【I】段 若者と猫

・板廂いたがし…木の板で葺いた粗末な庇ひさし。建物の窓などの上部に張り出させた片流れの日除け・雨除け・雪除けを目的とした小さな屋根。軒のき。

←

★運送屋で一階はガレージも兼ねているかも知れぬが、くれぐれもその総体が木造の粗末な造作であることを十全にイメージさせる。二階であるにも拘わらず、コオロギが多く侵入してくるとするのは、壁も古い土壁のような構造を説明した方が腑に落ちる。その壁が古くなって外側も内側も一部の土が剥落し、格子状の枠こま（木舞こまい）がちよつとのぞいているような感じを想起させる。

・「カナブンブン」は狭義には鞘翅コウチュウ（目多食カブトムシ）亜目コガネムシ下目コガネムシ上科コガネムシ科ハナムグリ亜科カナブン族カナブン亜族カナブン *Rhomborhina japonica*（緑色と銅色の個体がよく見られる）を指すが、一般人はコガネムシ科 Scarabaeidae 全般、特に金属光沢のあるものをひっくるめてこう呼ぶから（ここまではウイキの「カナブン」に拠る）、コガネムシ科スジコガネ亜科スジコガネ族スジコガネ亜族コガネムシ *Mimela splendens*（成虫の体色は時に赤紫の混ざった光沢の強い緑色・赤紫色・黒紫色のものもある。ここはウイキの「コガネムシ」に拠る）などのコガネムシ類全般としておくのが無難であろう。

・「蟋蟀」こおろぎ（音は「シツシユ」）直翅バッタ（目剣弁亜キリギリス）亜目コオロギ上科コオロギ科の昆虫類或いはその下のタクソンのコオロギ亜科 Gryllinae の

フタホシコオロギ族エンマコオロギ属エンマコオロギ *Teleogyllus emma*

コオロギ亜科 Modicogryllini 族オカメコオロギ属ハラオカメコオロギ（オカメコオロギ）

Loxoblemmus campestris

オカメコオロギ属ツツカドコオロギ *Loxoblemmus doentzi*

Modicogryllini 族ツツレサセコオロギ属ツツレサセコオロギ *Velarifictorus micado*

Modicogryllini 族 Gryllodes 属カマドコオロギ（イエコウロギ） *Gryllodes sigillatus*

などが代表的な種である。鳴き声は種によってかなり異なり、一般には、

エンマコオロギ 「コロ、コロ、コロ」「ヒヨ、ヒヨ、ヒヨ」

オカメコオロギ・ツツカドコオロギ 「リツ、リツ、リツ」

ツツレサセコオロギ 「リイ、リイ、リイ」

カマドコオロギ 「キリ、キリ、キリ」「チリ、チリ、チリ」

などと音写されるようである。個人的なSE(サウンド・エフェクト)としてはエンマコオロギか。

「現在のやぶちゃん注…この注は原授業案では『蟋蟀(音は「シツシュウ」)のみであったのを、今回、「カナブンブン」とともに追加した。「兵庫県立人と自然の博物館」公式サイト内の[こちら](#)で各種コオロギ鳴き声を聴ける。」

・外食券食堂：第二次世界大戦中の昭和一六(一九四一)年から戦後にかけて、主食の米の統制のため、政府が外食者用に食券を発行し(発券に際しては米穀通帳を提示させた)、その券を持つ者に限り、食事を提供した食堂。というより、これ以外の飲食店には主食は原則、一切配給されなかった。

「現在のやぶちゃん注：授業ではここで、確か、古本屋で入手した昭和二〇年(一九四五)年十月の戦後最初の『文芸春秋』復刊号の編集後記に記された、調理人の手漬や蛆が鍋の中で煮えているという凄絶な外食券食堂の不潔さを具体的に訴える内容を読み上げた。書庫のどこかに現物が埋まっているはずだが、見出せない。発見したら追記する。追加しておく、小学館の「日本大百科全書」梶龍雄氏の「外食券食堂」によれば、外食券は闇値で取引されることも多くなり、昭和二二(一九四七)年入浴料が二円の当時、一食一枚分の闇値が十円もしたという例もある。しかし昭和二五(一九五〇)年ごろより食糧事情が好転、外食券利用者は激減し、飲食店が事実上、主食類を販売するようになってからは形骸化して、昭和四四(一九六九)年には廃止されたとある。因みに、私は昭和三十二年生まれであるが、券も食堂も記憶にはない。」

☆時代背景(以上から)

敗戦後数年経った昭和二十年代前半の東京

★敗戦直後ではないと思われるが、本作(本作は昭和二三(一九四八)年九月号『文芸』に掲載された「いなびかり」「猫の話」「午砲」の三篇からなる「輪唱」の第二篇目)初出時期と外食券食堂の雰囲気から見ると、昭和二十二・二十三年辺りと考えてよい。

☆「若者」について

・孤独な猫に愛着を感じる「彼も孤独」であった

←

平凡ですこぶる純真な若者像

← ○第⑧段落「夜になると猫は彼に身体をすり寄せて寝た。」

← **猫に対する対等な強い共感表現に着目**

◎粗末なおんぼろの狭い（推定）蟋蟀が入ってくるような「運送屋の二階」に部屋を借りている

◎貧しい生活

← **定職なし（推定）**

★作中、主人公は猫と対峙し続け、仕事に出るシーンが全くないことに気づかせる。

☆猫について（第③・④段落）

皮膚が茶色のぶち・耳が薄く鋭く立っている・尻尾が長く垂れている

☆耳について≪★伏線≫

← **敏捷さ・鋭敏さの暗示**

← 直後の蟋蟀を捕獲するシーン（第⑤段落）の描写への伏線≪だけではない！≫

すっきりやせている・（しかし）**眼だけは澄んで光っている**・好物は蟋蟀

☆身体つきと眼について

← **若者自身と同様に、貧しい（貧弱である）**が、そこに**純真なもの**を感じさせる

← **若者と猫の重層性の暗示**

☆蟋蟀を捕獲する猫の描写（第⑤段落）

真剣な眼つき

「何か力に満ちていて、眺めていると、自分が蟋蟀をねらっているような錯覚に彼は落ちた」

← **「猫の」飢え** ≡ **「若者」自身**が現実の生活の中で痛烈に実感しているところの**飢え**

★当時の敗戦国日本の食糧事情の劣悪さを具体的な例を挙げて解説する。

← 逆に「猫」と「若者」の

本能としての「生」のエネルギー―生命の強い存在感

としてもそれが立ち現われてくることに注意！

←同時に

若者と猫の重層性の明示

☆第⑥段落

★これが実は**不吉な伏線**あることに気づかせる

「細い剣のような触角が畳の上に散らばっていた。それが足の裏にざらざら触れる」

←

第【III】段落⑩段落の描写

「カロの死骸が」「分割され、」「タイヤに」「附着して、東京中を駆けめぐ」る

☆漢詩について（第⑥段落）

蟋蟀在堂 蟋蟀 堂に在り

歳聿其莫 歳 聿に 其れ莫れん

（しっしゅどうにあり、としここにそれくれん）

中国最古の詩集「詩経」唐風（現在の山西省の歌謡で周王朝の重要な位置を占めた晋国しんの歌群）にある詩「蟋蟀」の冒頭の二句（全三章構成で後で二度冒頭でリフレインされる）。「莫」は「暮」に同じ。「こおろぎが家の中で鳴く季節となった。まさに今年も暮れようとしている。」という意味で、詩全体は『時の過ぎゆくのは速い、人の命は短い、今を楽しまないと取り返しがつかないよ』といった内容。

「現在のやぶちゃん注…授業では一切、原詩を示さなかったので、今回はオリジナリティを出すために全部を引いておく。底本は一九五八年刊岩波中国詩人撰集吉川幸次郎注「詩経國風 下」に拠った。下の訓読は吉川氏によるものを参考にしつつ、私が独自に附した。何故なら、底本の訓読文は納得出来ない新字現代仮名遣だからである。また、読みは振れるもののみとした。

蟋蟀

蟋蟀在堂

蟋蟀 堂に在り

歳聿其莫 歳 聿に 其れ 莫れん
今我不樂 今 我れ 樂しまずんば
日月其除 日月 其れ 除らん
無已大康 已だ大いに康しむ無く
職思其居 職めて其の居めを思へ
好樂無荒 樂しみを好むも荒む無く
良士瞿瞿 良士は瞿瞿たり

蟋蟀在堂 蟋蟀 堂に在り
歳聿其逝 歳 聿に 其れ 逝かん
今我不樂 今 我れ 樂しまずんば
日月其邁 日月 其れ 邁かん
無已大康 已だ大いに康しむ無く
職思其外 職めて其の外を思へ
好樂無荒 樂しみを好むも荒む無く
良士蹶蹶 良士は蹶蹶たり

蟋蟀在堂 蟋蟀 堂に在り
役車其休 役車 其れ 休まん
今我不樂 今 我れ 樂しまずんば
日月其愆 日月 其れ 愆ぎん
無已大康 已だ大いに康しむ無く
職思其憂 職めて其の憂ひを思へ
好樂無荒 樂しみを好むも荒む無く
良士休休 良士は休休たり

底本の吉川氏の注には、本詩篇について『朱子は、勤儉な晋の人民が適宜な快樂をお互いにすすめあう唄とする』という一解釈を載せる。以下、禁欲的に語注する。

・「除」は「去る」の意。

・「無已大康」は『といてむやみに遊びすぎずに』と訳されてある。

・「職」は副詞の「つとめて」で心を集中しての意で「職思其居」は『せいぜい任務のことを考えよう』と訳され、「居」は、一説にこればかりは従わねばならない「国中の政令」の

意であるらしい。

- ・「好樂無荒」の訳は『遊びずきだがはめはずさない』。
- ・「良士」はよき若者。
- ・「瞿瞿」は気配り、細かなとろこまで行き届いた心遣い。
- ・「外」周囲の外の人や出来事。
- ・「蹶蹶」は擬態語で、動きがきびきびしていることを言うところ。
- ・「役車」は『百姓が農具をのせて野良へゆく車』で、それが「休」むというのは『冬の農閑期に』なったことを言うところ。
- ・「休休」やはり擬態語で、のびのびとしていることを指すとある。

←以上から、この二句の章句には

時間の無情な流れや人間存在の孤独性や徒勞が匂わされている

←ひいては

今の生の快樂から近い将来の死というイメージを内包した不吉な伏線 とも言える

←だからこそ

☆第⑦段落の意味

「この詩の一節だけを記憶していた」→ **読者への強い意味深長な印象付け**

★実際、この小説を読むと、訳が分からん、と感じるのは、この白文の漢詩箇所だけである。さればこそ、この作品のテーマを解く秘密の鍵がこの詩片に隠されているのではないかと、多くの読者は思うはずである。

★但し、この訓点もない「詩経」の一片から、以上の生の無常感を感じとることの出来た当時の食うことに精一杯だった読者は、必ずしもそんなにはいなかったのではないかとと思われる。作者梅崎春生も、そうした読者にとって顕在的で自明であるような伏線として、この詩片をここに伏線として配置した訳ではないように思われる。実際、春生の体験や記憶（本文にあるような実際の伯父——戦死した臭いが漂う——にこの詩を教えて貰ったというような）への個人的なオマージュであった可能性なども否定は出来ないであろう。

「現在のやぶちゃん注…てなことを黒板に書き、補足説明したのであるが、寧ろ、この解釈や解説は生徒には牽強付会とさえ思われてしまったかも知れない。されば、コオロギからこの「蟋蟀」(詩題自体が「蟋蟀」)が引き出され、それが、「秋」から「人生の秋」そして「死」という連想の意味合いで翳を落しているという程度に留めて構わなかったのでは、と今となっては思っている。」

☆擬音語擬声語擬態語(オノマトペ: onomatopée フランス語)の効果1(第⑤～⑩段落)
「ぱっと」「ぱりぱりと」「ざらざら」「べったり」「ぐりぐりと」

平易なりアリズムの表現く猫の存在が極めてリアルに浮かび上がる効果

★オノマトペの多用は逆に安っぽい日本文にも見えてしまう弱点も指摘。

☆なぜ「それを叱るすべもない」のか？(第⑩段落)

若者が持つてくる残飯では、到底、猫が満足するはずもないことが分かっているが、か
とって、彼は貧しく、十分な餌を与えることはできないから。

☆命名(第⑩段落)

カロ く名づけることによって、猫の存在感と現実感がぐっとアップする

★その構成上の位置の上手さを指摘する。

* * *

第【II】段 カロの死

☆擬音語擬声語擬態語の効果2(第①～③段落)

「ふらふら」「ひよろひよろ」「あっと」「ひよろひよろ」「ぐしゃっと」「がくがく」「ころ
ころ」

轢死の瞬間の奇妙にして鮮烈な生と死のリズム感

☆カロが轢死する場面を、実感的に表現しようとする意図と共に、凄惨な雰囲気から場面
が過度に重くならぬよう、多少の軽さを配慮の意も果たしている。

☆第①段落

「何かへんにふらふらした歩き方で、いつものような確かさがなかった。」

←これは

第⑦段落「ものを盗んでいるところを見付けられ、どこかをしたたかなぐられた」に繋が
り、餌を十分に与えられなかった自分にも**カロの死の責任の一端はある**と若者は考えてい
ることが明らかとなる。だからこそ、

「新しく涙が垂れた」

のである。

☆切迫した（不吉な）予感

☆**カロと若者の一体化**（第②段落）

「カロの身体がぐしゃつとつぶれる音を、彼はその時全身でありありと感じとった」

カロと若者の強烈にして凄惨な生と死の皮肉な一体性 ↓ 第【I】段落⑤段落との共鳴

□映像的手法による場面処理（第②段落）↳映像化の試み

★監督やカメラマンにクロス・アップさせるためのシナリオの書法を解説する（実際のシナリオには、カメラ・ワークやショット数などを書き込んだり指定してはならないし、実際にしないことを断わっておく。「長回し」について例を挙げて述べ、現代の映画のショット数の多さについて補足する。私がカラーにしない理由を述べる。

◎モノクロ／1シークエンス3ショットの例

○暗い空。（下にパンして）

○左の方へ小さくなったなっていく黒い自動車。（ロング・ショットからズーム・イン）

○広い車道の真ん中。カロ。そのぼろ布のように、ころがっている、つぶれた死骸。（ミディアム・ショット）【長回しの1ショット】

○若者の眼！（クロス・アップ）【1ショット】

○窓枠の、若者のがくがくと震える指！（同）（F. O.）【1ショット】

「現在のやぶちゃん注…何度かは、この前後の絵コンテを生徒に自由に描かせた。私は、文学作品の一場面を映像シナリオ風に授業したり、生徒に絵コンテやピクトリアル・スケッチに描き起させるのが好きであった。一番やったのが横光利一「蠅」で、私の映像シナリオは『**横光利一「蠅」の映像化に関わる覚書／シナリオ**』で公開しており、生徒の描いた優れた何枚かは、例外的に現在も保存している。その中でも**私の最後の教え子（当時、藤沢総合高等学校三年の女子生徒）の「蠅」からのものを本人の許諾を得て、画像で公開している**。未見の方は、是非、ご覧あれ。絵もすこぶる上手く、撮り方も絶妙で実に素敵だ！」

☆第③段落

「カロをこんなに愛していたとは、今まで意識しないことであった」

第②段落での無意識のカロとの一体感↳事件を契機として覚醒した感覚

「カロ」という「生」の実体存在を把握した若者

□「猫の話」第二段第③段落→映像化の試み→SE（音響効果）付き

◎モノクロ／1シークエンス10ショットの例（≒≒はSE）

★先に述べた通り、実際のシナリオはこんなものではありません。再指摘しておく。
カット・バックを解説し、フラッシュ・バック（凡そニコマ〇・五秒切りかえし）との違いを説明する。

○裸電球。（クロス・アップ）≒嗚咽（クレツツエンド）≒【1ショット】

○若者の部屋。蒲団にもぐって泣いている若者。（フル・ショット）【1ショット】

○布団の中。その顔。（クロス・アップ）【1ショット】

○生前のカロのいろいろなショット。（カット・バック）【3ショットほどでよろしく】

○布団の中。さらに激しく泣く若者の顔。（クロス・アップ）【1ショット】

○蒲団にもぐって泣いている若者。（ミディアム・ショット）

≒雨、降り始めている。雨音（クレツツエンド）。（オフで）≒

≒雨、だんだん激しく、板廂をはじく。板廂をはじく雨音。（クレツツエンド）（オフで）≒

【長回しの1ショット】

○板廂をはじく雨。（クロス・アップ）【1ショット】

○蒲団にもぐって泣いている若者。（ミディアム・ショット）

≒遠い雷の音。近くの雷の音。≒

≒雷、小さく、突然大きく。≒（この間、ミディアムからゆっくりフルヘズーム・アウト）

○若者の部屋。まだ泣いている若者。

近くの雷光、一閃！ 電球、消える。停電。

≒自動車の水をはねて疾走する音。（オフで）≒

雷。部屋の中を一瞬照らす。

≒自動車の水切り音（断続的に）（F. O.）≒【長回しの1ショット】

「現在のやぶちゃん注…これが生徒に配布したものは、これは確か三段（場面・音響・ショット数）に分けたチャートになっていた。」

※カロの死を実感し、その悲しみにくれる若者の嗚咽を、

雨音

←

板廂をはじく音

←

遠く／近くで鳴る雷の音

← 断続する自動車の水切り音

といった順で、音響が追いながら、彼の悲哀に満ちたウエットな心象風景を本文に即して切なく撮ってみた私の例である。本文自体がカロの回想をカット・バックの映像的手法で浮かび上がらせ、蒲団にもぐった若者の涙を誘う辺り、極めて映像的な、優れたシークエンスを構成していると私は思う。

☆翌朝（第④段落）

内向していく感傷

← 泣くだけ泣いてしまつて一種の放心状態にいる若者

◎カロの死骸の描写く何度も轢かれたカロ

← 「板のようにうすっぺらになって」いる。

← 「舗道に平たく貼りついてい」る。

← 「猫の身体のかたちのまま、面積は生きている時の五倍にもひろがってい」る。

← 乾いた客観的な表現ながら強烈なリアリティを持つ存在

◎「見る」ことをやめる若者く無惨さに耐えられない

← 実際に見てもカロの死をどこかで認めたくない

← *前文「やはり夢ではなかった」

☆往来する自動車の音だけを聞いている若者（第⑤段落）

← しかし、その心はさらにさらに平べったくのされていくカロを

心の眼で見る苦しみ

← に満ちている

☆その翌日く轢死後二日（第⑥段落）

◎再び「見る」ことを始める若者

← ・カロの死骸の変化

← 乾燥した、カロの死骸への奇妙な感覚の変化を「かわく」を四度繰り返すことで示している。

「猫の死骸という感じではな」い

「猫の形をしたよごれた厚紙」

「四囲の部分が」「めくられ、ひらひらと動いてい」る

☆第⑦段落

◎カロの回想とカロの轢かれた身体の無惨に強いられる変化（立体から平面へ）との対比

← 「「ぼろ布」 第②段落」

← 「「板」 第④段落」

← 「「よごれた厚紙」 第⑥段落」

← 「「よごれた紙」 第⑦段落」

それが、

「生前のかわいらしいカロの仕草表情」とカット・バック

され、

→ **生き生きとしたかわいらしいカロ**

← 「胸をかきむしりたくなるような悲哀感」

← **無機質化され実体を失った「物」にされてしまったカロ**

☆**存在を否定されることへの強烈な怒りがあるが、それはどこへおつけようもないという現実。**

◎カロの死について現実的な解釈を考える若者

ここでは確かに激的な悲しみは既に収まっているとは言えるが、**カロの死の責任の一端が自分にもあると考えている若者にとって、悲哀はさびたなびた重く哀しいものとなっている**ことに着目せねばならない。

← **「新しく涙」を「垂」らす若者**

* * *

第【Ⅲ】段 消滅するカロ（☆轢死後三日（第①～⑤段落））

・「凝然と」形容動詞タリ活用で、凝つと動かずにいるさま。

◎「見続けること」を始める若者

カロの死骸の更なる変化

↳ 少しずつ、**その身体を理不尽にも持ち去られていくカロ**

「何かに引き抜かれるような感じ」

← **再び襲ってくる悲痛な一体感**

← 「何か言いようのない深い哀しみ」

それは、『たとえ薄っぺらい紙のようになって、カロは存在感を主張し続けている』と若者は「思いたい」「思わずにいられようか」

← ゆえにこそ

「一日中通りを」⇨カロを「見張っていた」

↳ 「カロ」と表現しているところに注意（「死骸」ではなく）

↳ 「どうしても放っておけない気持」

★ここに限らず、**カロが轢かれた直後のシーンから既に生徒の中には、何故、若者はカロを道から移して葬ってやらないのか？** という疑問を持つ者も多くいるであろう。しかし、では、それは小説に「なる」か？ そうしたシーン展開を君が作家としてした場合、その作品はどんなものになり、どんなことを読者に訴えるものとなるか、を考えて見てほしい、と逆に聞いかけていた。それは、批判ではない。寧ろ、本作のテーマを考えるための重要な鍵と、実はなるはずであるからである。

カロの死と向き合うことの決意する若者

◎霊柩車の皮肉

死を悼み、遺体を鄭重に運ぶべき霊柩車が、遺体を轢いて、しかもその一部を持ち去る

↳ **一種の非情なパラドックス**

☆第⑤段落 「夕方になると、カローは半分になっていた」↳痛烈な一行（★一文単独段落にしている手法に着目）

☆轢死後四日（第⑥段落）

◎「見張ること」に徹する若者（「昨日から、ずっと」）

カローの死骸の極端な変質

・確認

「ぼろ布」【Ⅱ】②↓【Ⅱ】「板」④↓「よごれた厚紙」【Ⅱ】⑥↓「よごれた紙」【Ⅱ】⑦
が、遂にここでは、

「二尺」（三〇・三センチメートル）「四方ぐらいの、白茶けた」襪襪ほろとされてしまう。

←
そして、それは、カローのどの部分だったのか？

←
☆頭部↳第⑦段落 「顔の部分はまだ残っていた」

☆第⑦段落

「薄い鋭い耳たぶの形を思い出して」（第【Ⅰ】段第③段落）

↳伏線の強化

「声を出してうめいた」|| 同一体としての激烈な痛み

☆轢死後四日の夕方（第⑧段落）

「手帳ほどの大きさ」

「カローの顔の部分」

↳が最後まで残っている

↳それは 僕は『カローなんだ！』という存在の証しへの執念の叫び のようなもの

「異様な緊張を持続しながら」見守り続ける若者

↳ カローの執念を共有する存在としての若者

☆第⑨段落

「祈願」↳「若者」⇨「カロ」の神への祈りに等しい叫び

カロにとつて⇨若者にとつて

唯一の实在した証し

であり、

存在証明（レゾン・デートル）であり、最後の尊厳であるもの

・raison d'être … フランス語。「存在理由」「存在意義」「生き甲斐」などとも訳される。

☆最後の瞬間（第⑩段落）

・擬音語擬声語擬態語の効果3

「ぼろぼろ」「ど」と」「あつ」という間もなく」「へろりと」「がた」と」「一目散に」

酔っぱらいの乗った、ぼろぼろのタクシーに持ち去られねばならない（最後のカロ）

◎まるで冗談か喜劇のような幕切れ

馬鹿げた理不尽なものによって（カロ）の实在が否定されるゆえにこそ、救いようのない

哀しみがダメ押しで強調される

↳対位法的手法

★音楽用語の対位法から、映像的なそれについて説明する。

☆その直後↳泣く若者（第⑪段落）

「カロがすっかり行ってしまったことが、深い実感として彼に落ちた」

*ここも「カロ」であって「カロの死骸」でないことに注意。

☆「カロの死骸が、いまや数百片に分割され、タイヤにそれぞれ付着して、東京中を駆けめぐっていると考えた」時、「さらに声を高めて泣く若者

☆エピローグ↳その夜（第⑫段落）「カロの死後四日」

カロがいなくなったから、蟋蟀は安心して何匹も部屋の「すみに、安心してとまってい」
る

←

「本箱のかげにいたその一匹が、その時触角をかすかに慄わせながら、畳みの上にはい出

してきた。そして」／「いい」音^ねを出して」／「一声」／「高く」／「泣いた。」

蟋蟀とカロ

←の哀しい連想く余韻

蟋蟀の触角とカロの薄い鋭い耳たぶのオーバー・ラップ

●存在を完全に消し去られてしまうということの恐怖と怒り

●風化する「カロ」(消滅させられつつあるカロという存在)＝現実の世界の中のちっぽけで無力な存在としての主人公の「若者」

◎若者のカロに寄せる感情は、同情ではないということをはっきりと認識することが必要であろう。現実世界で、若者が自分の存在理由をはっきりさせることが出来ないように、カロも「生」を持つものとして実体が在ったにもかかわらず、結局、存在そのものさえも理不尽に否定されてしまうことへの深い哀しみという、強い同一化が行なわれているのである。「若者とカロのアイデンティティの問題」

☆現実世界の「生」に対する不条理性への言いようのない怒りと哀しみという主題

「現在のやぶちゃん注：●存在を完全に消し去られてしまうということの恐怖と怒り」以下は、言わずもがなで、今の私には不快以外の何物でもない、大団円——「作品の主題は何か？」——授業単元終了勝利の狼煙、といった塩梅の、クソの糞の部分である。こうしたキリは、受験教育に特化した私の国語の授業のまさに腐臭部分であるが、私はこの夏、前頭葉を損傷して嗅覚も失ったことで、クサイ臭いもしなくなったことだし、ともかくも過去の私自身への批判指弾の意味も込めて、敢えて曝し残すこととした。」